

倫理大国の建設へ

横綱審議会委員だった脚本家の内館牧子女史が、横綱朝青龍について次のように批判されていた。

「彼はプロスポーツ家としては立派だったが、横綱としては駄目だった」

この実には的確な批判に私たちは思い当たるものがある。今夏の参議院議員選挙を自民党から目指すものとしてピンピンと響くものがあるのだ。

日本の大相撲協会が長い伝統によって培われ育まれてきた格式、そしてしきたりを重んじてきたからである。

要するに徹底的に保守であったわけだ。そしてその保守の頂点に位するのが横綱であるのだから横綱には、品格、格式が強さ以上に求められてきたわけだ。

それが忘れられ始めたかのように、朝青龍が相次ぐ事件を引き起こし我が党も党の原点である保守を置き去りにしてきて、昨夏の総選挙で大敗し下野するに至ったわけだ。

1月24日に開かれた自民党大会でスピーチしたプロ野球の名将、楽天の野村克也前監督は話の中で「勝ちに不思議あり。負けに不思議なし。」といわれた。若僧の私が言うのも憚れるのだが、全く物の道理を言い当てられている。

そう、昨夏の総選挙は負けるべくして負けたのであって不思議はないわけだ。だとすれば、何故、敗北したのか、その原因は？

私はわが自民党が、保守、保守主義をおざなりにし、ないがしろにしたからではなかったか、と考えている。

平成元年にベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦構造にピリオドが打たれた。

するとこれに呼応したがのごとく、日本社会党という戦後の日本政治を二大政党制のもと我が党とともに担ってきた政党がみるみるうちに衰退した。いわゆる50年体制の解消である。

日本社会党とわが党との間には、月とスッポンほどの違いがあった。「社会党に政治を任せるのは危険すぎる。到底ダメ。」わが党が国民の支持と信頼を得たのは実にここにあって、と思う。いわば消去法。

ところが今日はどうか。一見、民主党とわが党の政策に開き、違いはなさそうに見える。

「違いがないのであれば、自民党はもう長いのだから、今度は変えてみるか。」
こうしてわが党は政権を交代させられた。

昭和58年の福岡県知事選では、5選を目指した現職が対立候補の掲げた「今度は変えてみませんか」のキャッチコピー一本に負けた。福岡県民にはこの理屈はよく判るのだ。

だが本当に民主党とわが党の間に違いはないのか。ある、ある、大ありだろう。かつて、日本社会党のために巢食った社会主義協会系の書記局員が、多数民主党の事務局員として活躍している政党とわが党が、本来似かよっているはずがない。

なぜ、似ているようにみられるのか。それは民主党が真実の姿を隠し、わが党はわが党

で本来の姿を明確に打ち出していないためだ。

私たちの政党は、本来の姿保守主義にきちんと回帰し、揺るぎない国家像のもと国際社会で尊敬される倫理大国を目指していくべきである。

そのためには、少子化対策確立のもの、次代、未来を担う青少年の健全育成が急務である。

一、乳幼児の医療完全無料化を実現するための法制度

一、義務教育費の完全無償化

一、青少年健全育成法の法制度化

新生児から義務教育を通じて、皇室を敬い、地域を愛し、国を愛することを教え、危険が迫った時は立ち上がる心をもった国民になるよう子どもたちを育てていかなければならない。このことが、将来の倫理大国建設につながる大きな柱になるものと考えている。